



閉校のしおり

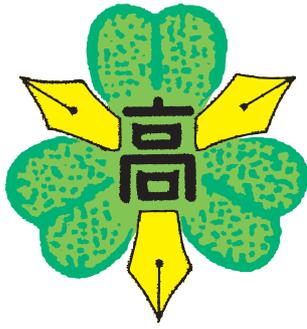


つめ草に寄せる和の誓い 高原の記憶永遠に

平成25年3月2日（土）

宮崎県立高原高等学校

場 所	高原町 ほほえみ館
受 付	13：00～
閉校式	14：00～



校章の由来

三つの葉は本校にふさわしい牧草のクローバーで、つめ草の旗、として校歌にも歌い込まれている。三つのペンは絶ゆまざる勉学を表し、これらが放射状に画かれて無限の発展を示している。全体が三角形とも見えるのは、秀峰高千穂峰を表している。

(図案の作製者は元美術担当の`野津 薫、先生)

校 訓 「質実剛健」



閉校式 式次第

- 一、オープニング
- 一、開式のことば
- 一、国歌 斉唱
- 一、物故者 黙祷
- 一、学校沿革報告
- 一、宮崎県教育委員会式辞
- 一、学校長 式辞
- 一、同窓会会長あいさつ
- 一、宮崎県議会議長あいさつ
- 一、高原町長あいさつ
- 一、来賓並びにメッセージ紹介
- 一、生徒代表のことば
- 一、校旗 収納
- 一、校歌・生徒歌 斉唱
- 一、閉式のことば

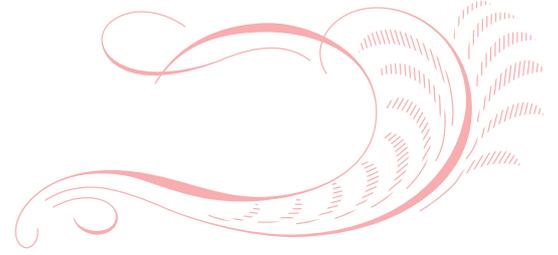




■ 式 辞

学校長

矢 田 憲太朗



開校以来60年間、本校を見守り続けてくれた霧島の山々にも、新たな命を育む春が巡ってきました。本日ここに、宮崎県高等学校再編整備計画の一環として閉校を迎える高原高等学校の閉校式を挙行するにあたり、多くのご来賓の皆様、並びに多数の同窓会地域の皆様、PTAの皆様のご臨席を賜りましたことに衷心よりお礼を申し上げます。

顧みますと、本校は西諸県地域の産業振興のために農学校を設立しようとする地域の熱い想いと活発な取組が実を結んで、昭和27年に現在の県畜産試験場の場所に、校名に畜産が入った全国でも珍しい農業高校「高原畜産高校」として開校し、その後、昭和44年に現在の地に全面新築移転されました。この当時の学校規模は、畜産科2学級、農業科、農産化学科、生活科各1学級の1学年5学級規模で、規模・施設設備とも充実していた時期であり、多くの人材を養成し、特に今日の地域農業振興に大きく寄与する指導者・経営者を輩出しております。しかしながら、平成に入ると中学卒業生数の減少などにより学級減を行い、平成5年度には現在の「高原高等学校」に校名を変更するとともに、学科改編を行うなど時代の変化や社会のニーズの変化に対応して参りました。

このような流れの中でも、高原町長を会長とする高原高校農業後継者育成協議会等の力強いご支援ご協力もあり、海外ファームスティや北海道ファームスティといった本校独自の農業教育の取組は充実発展し続け、農業へ夢と誇りをもった経営者を育成するとともに、農業関連産業や食品関連産業の担い手育成に取り組んで参りました。さらに、本校最後の年である今年度には、これまでの取組の発展型として地元の農事組合法人と連携協定を結び、農業の6次産業化等も視野に入れたより実践的な農業学習を取り入れ、地域と共に地域産業の担い手を育成する新しい担い手教育へも取り組んで参りました。また、平成15年度に新設した福祉科においては、今後の高齢化社会を担う人材育成に力を入れ、多くの介護福祉士の養成を行って参りました。

本校閉校後、本校がこれまで西諸県地域で担ってきた専門教育の使命は、小林秀峰高校の農業科と福祉科に受け継がれて行きます。また、本校農場の一部は、同校の畜産実習施設として活用されます。これらのことを思うと、本校が60年の幕を閉じることは大変寂しいことではありますが、地域の専門教育の学びは発展し続けることと確信しております。

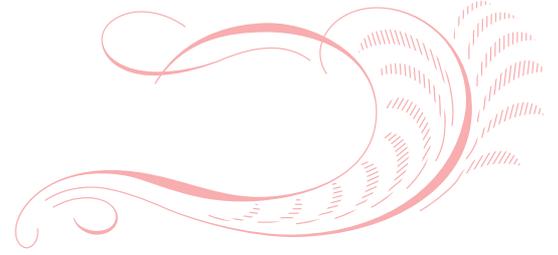
終わりに、60年間の長きにわたり、本校を支えて本校生徒を慈しみ育てていただきました地域の皆様、ご支援をいただきました同窓会の皆様方、歴代校長先生をはじめ旧職員の皆様方のご努力に敬意と感謝の意を表しますとともに、本校に関係した全ての皆様方の今後のご健勝とご多幸をお祈りいたしまして、式辞といたします。



■ あいさつ

つめくさ会会長

前 田 勝



宮崎県立高原高等学校の閉校式の開催にあたり、宮崎県立高原畜産高等学校・宮崎県立高原高等学校同窓会つめくさ会を代表し、ご挨拶申し上げます。

戦後間もない頃、地域農業振興を推進する農業後継者、農村指導者を育成する高等学校設置の機運が高まり、地元有識者の方々の7年間に亘る熱心な高等学校建設運動が展開され、昭和27年4月に宮崎県立高原畜産高等学校として全日制課程畜産科と全日制農村家庭科、定時制課程農業科の設置が認可され、畜産を校名に取り入れた全国唯一の高原畜産高等学校が誕生しました。

創立から16年間は県種畜場（現：県畜産試験場、肉牛産肉検定所）の敷地の一角にありましたが、昭和44年3月に現在地に移転しました。

爾来幾多の変遷を辿りつつ60年の歴史を刻み、本校で学び巣立った卒業生は7,000余名を数えております。卒業生は本校で学んだことを礎に、自分の進むべき方向をしっかりと見定め自信と誇りを持って、各方面で活躍致しております。

農業後継者として、農業経営を営んでいる多くの卒業生はそれぞれ特色のある経営を実践し、優れた経営者として、更に地域のリーダーとして農業の推進に貢献致しております。

5年毎に開催されます第10回全国和牛能力共進会が平成24年10月長崎県で開催されました。

本県から28頭、うち西諸地域より12頭の和牛が出品され、本校卒業生が飼育されている種牛3頭が県代表として出品、2頭が優等賞2席、1頭はセット（種牛4頭、肉牛3頭）で出品し優等賞首席、併せてグランドチャンピオンを獲得、文字通り日本一を達成し内閣総理大臣賞受賞に輝き、日頃のたゆまない努力の成果が実現されました。

学校の閉校直前の事実で意気消沈しているこのときに、今回の快挙は私たちに勇気、元気、感動を与えてもらい大きな励みになりました。

西・北諸地域が県内有数の農業、特に畜産振興地域として発展しております。これには、本校卒業生が大きく関わっており、地域に根ざして市町村行政並びに農業関係団体の技術指導者として熱心に取り組んだ成果であると自負しております。

また、本校の創立に当たりましては、誘致運動以来今日まで、深いご理解と絶大なるご支援、ご協力を頂きました高原町の歴代町長様に心より深く御礼申し上げます。

特に、町長様自ら生徒出身市町村長や関係農協長を熱心に説得し、本校農業後継者育成協議会を創設していただき大きな役割を果たしてくださいました。そして様々な農業後継者育成のための事業も進めて頂きました。特に印象深いことは、カナダ国での海外営農実習を実現してもらった事でありました。卒業生が現地でホルスタイン牛の牧場経営を営んでおり、事が順調に進んだことは望外の喜びでありました。

今まで慣れ親しんできた本校は本日で姿を消しますが、血気果敢な高校時代に培った様々な思い出を胸に抱きつつ、今後はつめくさ会の活動を心の糧として邁進していきたいと思っております。

幸いにも本校農場は、小林秀峰高等学校の実験・実習農場として活用されることになると伺っておりますが、忘れがたい本校の一部が今後活用されることは、卒業生にとって嬉しい限りであります。

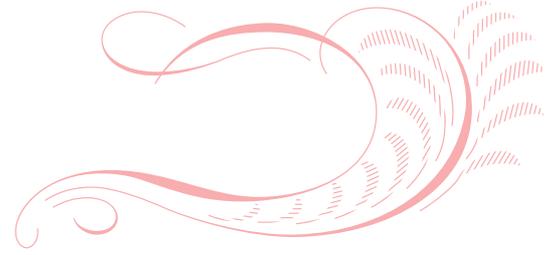
高原畜産高等学校・高原高等学校が育んだ精神は、小林秀峰高等学校の農業関係学科の生徒の皆さんに継承して頂きますが、農業後継者として、また関連産業従事者として社会に貢献出来る人材に成長されることを願いつつ、小林秀峰高等学校の今後の発展をご祈念致します。



■ あいさつ

宮崎県知事

河野 俊 嗣



宮崎県立高原高等学校の閉校式にあたり、ごあいさつ申し上げます。
貴校は、昭和27年度に開校以来、60年の長きにわたり、輝かしい歴史と伝統を築いてこられました。この間、県西地域における高等学校教育、そして農業教育、とりわけ畜産教育の要として、地域はもとより県全体の発展に大きく貢献されるとともに、7千名を超える有為な人材を輩出し、卒業生は県内外を問わず幅広い分野で活躍されております。

これもひとえに、地元高原町をはじめ、県西地域の皆様の長年にわたる温かい御支援、御協力と歴代の校長先生をはじめとする教職員各位の献身的な御指導、並びにPTA、同窓会、関係者の皆様の並々な御尽力の賜物であり、厚くお礼申し上げます。

貴校は、学業・スポーツ・文化など様々な分野において大変素晴らしい成果を重ねてこられ、特に海外研修等も取り入れた農業後継者育成事業の推進や介護福祉士国家試験資格取得率の向上において、輝かしい実績を上げてこられました。また、グローバルな視野のもと、韓国的高等学校との姉妹校締結など、国際親善を含む農業教育にも力を注いでこられました。これまでの貴校の歩みと卒業生の皆様の数々の御活躍に改めて心から敬意を表する次第であります。

さて、最後の卒業生となられた皆さんは、学業はもとより、部活動や学校行事等に全力を尽くしてこられました。貴校の有終の美を飾っていただいた、皆さんの努力に心から拍手を贈りますとともに、これからも貴校で学ばれた自信と誇りを胸に、それぞれの道で更に精進を重ねられ、社会に貢献されることを心から期待しております。

貴校は、この3月をもって閉校となりますが、かけがえのない青春時代を過ごした思い出深い母校の閉校に、同窓生の方々の胸中はいかばかりかと拝察いたします。さらに、地域の方々におかれましても、長年慣れ親しんできた貴校に対する惜別の情はひとしおのことと思います。

これまで貴校が築いてこられました歴史と伝統は、平成20年度に開校いたしました小林秀峰高等学校に引き継がれることとなります。今後、農業科におきましては、農業教育の専門性をさらに高め、生産、流通、販売等が一体となった新たな農業教育が展開されるとともに、福祉科におきましては、国家資格の取得はもちろんのこと地域社会の福祉活動に貢献されるなど、本県さらには我が国の未来を担う人材を育成していただけることと期待しております。

県といたしましては、引き続き学力、文化、スポーツのレベルの向上、地域における教育力の充実など教育の振興に全力を傾けてまいりたいと存じますので、皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。

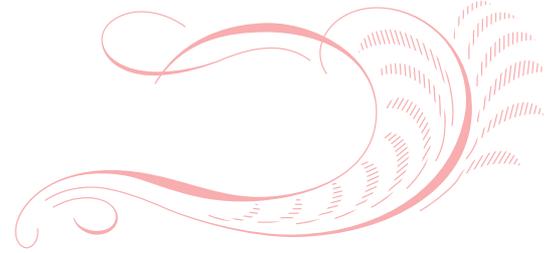
最後に、高原高等学校同窓生の皆様、そして60年の歴史の中で格段の御尽力をいただきました関係者の方々に対し深く敬意を表しますとともに、皆様方の御健勝、御多幸を心から祈念申し上げまして、ごあいさついたします。



■ あいさつ

宮崎県議会議員

外山 三博



宮崎県立高原高等学校の開校式にあたり、県議会を代表いたしまして、一言ごあいさつを申し上げます。

本校は、昭和27年に開校されて以来、「質実剛健」の校訓のもと、県西地域を牽引する高等教育機関として、今日に至るまで輝かしい歴史と伝統を築き上げてこられました。

この間、本校において、知識や技能の習得に充実した日々を過ごし、卒業された7千名余の有為な人材は、地元の県西地域はもとより、県内外において農業をはじめ各分野で活躍されるなど、本県そして我が国の発展に大きく御貢献いただいております。

これもひとえに、開校以来、その発展に情熱を注がれた歴代の校長先生をはじめ教職員の皆様の御努力と、PTA、同窓会、地域の皆様方の献身的な御支援と御協力の賜であり、深く敬意と感謝の意を表する次第であります。

このように発展してきた本校も、この度、最後の卒業生を送り出し、その歴史に幕を下ろすこととなりました。時代の流れとはいえ、かけがえのない母校の閉校に、本校を巣立られた皆様の心中をお察しすると万感胸に迫るものがございます。

また、地域の皆様方も、慣れ親しんだ本校への惜別の情はひとしおのことと存じます。

しかしながら、「地域とともにたくましく生きる」人材を数多く輩出してこられた本校の雄姿は、多くの卒業生や関係者の方々の胸に深く刻まれ、脈々と生き続けるとともに、60年という長い年月に培われた輝かしい歴史と伝統、並びにその崇高なる精神は、県立小林秀峰高等学校へ、そして後進の方々に継承されることにより、さらなる発展を遂げていかれるものと確信いたしております。

同窓生及び最後の卒業生となられた皆様には、今後とも母校の名を永く讃え、その伝統と精神を守りながら、本校卒業生としての自信と誇りを胸に、我が国そしてふるさと宮崎の一層の発展のために御活躍いただくことを心から願っております。

また、教職員の皆様をはじめ、関係者の方々におかれましても、本県教育のさらなる振興に、引き続き御尽力を賜りますようお願い申し上げます。

県議会といたしましても、本県教育のさらなる振興に、全力で取り組んでまいり所存でありますので、変わらぬ御支援、御協力をよろしくお願いいたします。

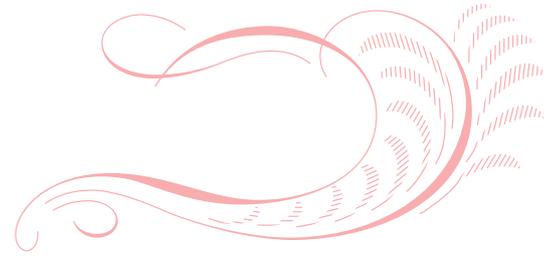
結びに、長年にわたる関係各位の御尽力に重ねて御礼を申し上げますとともに、御列席の皆様方の御健勝、御多幸を心から祈念いたしまして、ごあいさつといたします。



■ あいさつ

宮崎県教育長

飛 田 洋



宮崎県立高原高等学校の開校式にあたり、ごあいさつを申し上げます。

本校は、昭和20年度に開設された宮崎県立都城農学校高原青年学校を前身として、昭和27年度に高原畜産高等学校として設立され、「質実剛健」を校訓に、つめ草の校旗のもと、畜産教育を中心とした農業を担う人材の育成に一貫して取り組んできました。

平成5年に高原高等学校に校名を改称し、今日に至っておりますが、その間、本県農業教育の充実・発展に大きな役割を果たしてきており、この学舎を巣立った7千名余りの卒業生は、本県はもとより我が国の農業及び福祉の発展をはじめ、様々な分野に大きく貢献されております。

これもひとえに、本校の発展と教育の充実のために御尽力いただきました歴代の校長をはじめ教職員の皆様の熱心な取組と、P T A並びに同窓会各位、地域の皆様の深い御理解と献身的な御協力の賜物であり、厚くお礼申し上げます。

今日、我が国においては、国際化や科学技術の発展など、社会が急速に変化しております。このような中、本校は社会の変化に対応できる農業教育及び福祉教育の推進という教育方針のもと、感性豊かで地域に貢献する人材の育成を目指し、教育の充実に努めてきました。特に、自然に恵まれた広大なキャンパスを活用した実習・実験を重視する授業の展開、農業後継者を育成するための県外研修などの研修の充実、地域社会における福祉活動等の社会貢献活動の推進、介護福祉士国家試験合格率向上に向けた取組、さらには韓国の發安（ばらん）バイオ科学高等学校との姉妹校締結をとおした国際理解講座やハンゲル語の選択科目の開設など、常に時代を先取りする教育を実践し、その成果を広く県内外に発信してきました。

今年度をもちまして、県立高原高等学校の歴史は幕を閉じることになりますが、これまで本校が、ここ高原の地をはじめとして、県西地域に残してきた業績は、今後も本日御臨席の皆様や同窓生、地域の皆様はもとより、多くの県民の心の奥深く留まることと思います。

平成20年4月に開校いたしました小林秀峰高等学校は、農業科、機械科、電気科、商業科、経営情報科、福祉科の6学科を有する総合制専門高校であります。本校がこれまで目指してこられた教育理念は、小林秀峰高等学校へと引き継がれ、新たな歴史を刻んでいかれるものと確信しております。

最後に、本日御来賓として御臨席いただいております高原町長、県議会議員の皆様をはじめ、保護者、同窓会及び地域の皆様方に、これまで高原高等学校の運営に多大な御理解と御協力を賜りましたことに対し、改めまして厚くお礼を申し上げますとともに、本校創設以来の学校関係者全ての方々の御尽力に対しまして心から感謝を申し上げます。

高原高等学校にゆかりの全ての方々に「つめ草に寄せる和の誓い 高原の記憶 永遠に」さらには、校歌の一節「栄光あれ」をお送りし、ごあいさつといたします。



■ つめ草の校旗を胸に

宮崎県高原町長

日 高 光 浩

霊峰高千穂峰のすそ野に広がる高原町の自然豊かなこの地で、七千有余名の多くの学生がその門を巣立っていった宮崎県立高原高等学校の閉校に当たり一言ご挨拶を申し上げます。

昭和27年4月の創立以来実に60年の永きに亘り地域の教育を担い、営々とその伝統を築いてまいりました高原高校がこの3月をもってその輝かしい歴史を閉じ、新しく県立小林秀峰高等学校に引き継ぐこととなりました。

前身である県立都城農学校高原分校が開設された昭和20年以降も含め、高原高校の教育を支えていただきました歴代の校長先生や教職員の皆様をはじめ、同窓会・PTAの方々そして地域の皆様と一緒にいま改めてこれまでの歩みを顧みますとき、その歴史に感無量の思いが込み上げてまいります。

これまで高原高校は「質実剛健」を校訓として西・北諸地域を中心に、農業・食品加工・福祉の分野に多くのすぐれた人材を輩出してまいりました。

特に全国で唯一「畜産」の名を冠した高校という歴史を踏まえながら、農畜産業教育の中核的学校として大きな役割を果たしてまいりました。

とりわけ地元である高原町にとりましては、これまでに多くの卒業生が学び舎を後にあらゆる分野で活躍をされております。そして西・北諸地域の基幹産業である畜産・園芸を主とする農業分野では、その卒業生は高い知識と明日を拓く気概に燃えて今日の西・北諸地域を支えていただいております。60年の歴史を閉じるこの期に深く感謝と敬意を表します。

高原高校は、このような地域の方々の温かいご支援に応えようと一步一步確かな歩みを続けてまいりましたが、4月からその伝統を小林秀峰高等学校に引き継ぐこととなります。惜別の情を禁じ得ませんが、高原高校で学んだ青春の日々は、卒業生の皆さんの胸中に「あかねかがよふ高千穂を、けだかく仰ぐよき里に、つめ草の校旗（はた）ひらめきて、若き血潮は躍るかな」とある校歌と共に深く刻まれていくものと信じております。

結びとなりますが、これまで高原高校にお寄せ頂いた皆様の温かいご理解とご支援に対し心から感謝申し上げますとともに、多くの卒業生並びに関係頂いた方々の今後の御健勝・御発展を祈念申し上げます。地元高原町からのあいさつといたします。

沿革

昭和20年	4月 1日	宮崎県立都城農学校女子部三年課程を高原青年学校校舎に開設（本科二年制・研究一年制） 校長 河野光雄 校舎主任 雨田新一郎
昭和21年	4月 1日	宮崎県立都城農学校高原分校を設置し、畜産科5年課程を併設 女子部は青年学校校舎を使用、畜産科は宮崎県種畜場使用 校長 泉 清 分校主任 春口勝弥
昭和23年	4月11日	学制改革により宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校高原校舎と改称、女子部は農業課程、畜産科は併設中学校の課程となる 校長 綾 哲一 校舎主任 春口勝弥
昭和24年	3月31日	宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校高原校舎廃校、生徒は希望により小林・都島・都城泉ヶ丘の各高等学校に各々転学又は入学
昭和24年	7月 1日	宮崎県立小林高等学校高原分校の設置認可、定時制課程農業科・家庭科を設置 校長 麻生房助 分校主任 亀沢文雄
昭和24年	9月 1日	宮崎県立小林高等学校高原実習場設置認可 定時制課程農業科・家庭科入学式挙行
昭和25年	3月 1日	宮崎県立小林高等学校高原校舎設置認可 全日制課程農業科畜産コース・家庭科被服コース設置
昭和25年	4月11日	畜産コース・被服コース入学式挙行
昭和27年	4月 9日	全日制課程家庭科被服コースは同生徒と共に本校（小林高等学校）へ統合
昭和27年	4月10日	仮称宮崎県立高原高等学校入学式を小林高等学校において挙行 （畜産科・家庭科各一学級）
昭和27年	6月 1日	宮崎県立高原畜産高等学校全日制課程畜産科・農村家庭科・定時制課程農業科設置認可 校長 春口勝弥 宮崎県立小林高等学校高原校舎を本校に整理統合し在籍生徒、全日制課程畜産科・定時制課程農業科・家庭科133名を本校に編入
昭和28年	2月 7日	開校式挙行
昭和29年	3月31日	熊本営林局と分収林設定契約（高原町大字広原大鹿倉5503番地） 分収率 国0.2 県0.8
昭和30年	4月 1日	校長 春口勝弥 宮崎県教育庁指導主事へ転出 宮崎県教育庁指導主事 前田義徳を校長に任命
昭和32年	3月30日	全日制課程有畜農業科を設置認可され募集開始
昭和36年	4月 1日	校長 前田義徳 都城都島高等学校へ転出 教頭 加藤富司雄を校長に任命
昭和37年	4月 1日	校長 加藤富司雄 川南高等学校へ転出 南郷園芸高等学校 松岡三郎を校長に任命 定時制課程募集停止
昭和38年	1月 7日	定時制課程農業科定員40名募集再開 全日制課程農村家庭科を生活科に改編
昭和39年	4月 1日	校長 松岡三郎 高鍋農業高等学校へ転出 日南農林高等学校 中村道夫を校長に任命
昭和41年	4月 1日	校長 中村道夫 退職 小林高等学校教頭 峯崎清隆を校長に任命
昭和43年	4月 1日	畜産科学級増（2学級定員84名）有畜農業科を農業科に改称 農産化学科1学級新設（定員42名）定時制募集停止
昭和43年	9月 2日	新校舎において第一学年生のみ授業開始
昭和43年	10月	定員改定（畜産科82名 農業科41名 農産化学科41名 生活科41名）
昭和44年	3月 5日	第2・3・4学年新校舎に全面移転
昭和46年	4月 1日	校長 峯崎清隆 退職 日南農林高等学校長 鎌田政範を校長に任命
昭和47年	3月22日	校長 鎌田政範 死去
昭和47年	3月23日	教頭 道倉晃 校長職務代理
昭和47年	4月 1日	都城農業高等学校教頭 一廣礎夫郎を校長に任命
昭和48年	4月 1日	農産化学科を食品化学科に改称
昭和52年	6月 1日	創立25周年を迎える
昭和55年	4月 1日	校長 一廣礎夫郎 宮崎農業高等学校に転出 都城農業高等学校教頭 栗山忠己を校長に任命
昭和56年	4月 1日	畜産科1学級減
昭和58年	3月31日	乳牛舎更新（330㎡）飼料調整室（80㎡）乾燥調整室（50㎡）堆肥舎（50㎡）新設
昭和58年	4月 1日	校長 栗山忠己 宮崎農業高等学校へ転出 都城農業高等学校長 嶋田茂夫を校長に任命
昭和60年	4月 1日	校長 嶋田茂夫 高鍋農業高等学校へ転出 門川農業高等学校長 大岩忍を校長に任命
昭和62年	3月25日	園芸実習室（バイオ実習室等）新設（288㎡）農業機械実習室（150㎡）新設
昭和62年	4月 1日	校長 大岩忍 退職 都城農業高等学校教頭 長嶺敏郎を校長に任命
平成2年	4月 1日	生活科を生活科学科に改称

平成3年 4月 1日 校長 長嶺敏郎 退職 高原畜産高等学校教頭 石川定雅を校長に任命
農業科・畜産科を募集停止し生産流通科を新設

平成5年 4月 1日 校長 石川定雅 都城農業高等学校へ転出 高原畜産高等学校教頭 杉田旭を校長に任命
宮崎県立高原畜産高等学校を宮崎県立高原高等学校に校名変更

平成5年 4月12日 校名改称式举行

平成6年 4月 1日 校長 杉田旭 退職 都城農業高等学校教頭 吉國修を校長に任命
生活科学科を募集停止し、福祉生活科を新設

平成8年 4月 1日 校長 吉國修 退職 門川農業高等学校教頭 木幡隆雄を校長に任命

平成9年 4月 1日 校長 木幡隆雄 高鍋農業高等学校へ転出 日南農林高等学校教頭 前田勝を校長に任命

平成9年11月30日 管理棟大規模改修工事完成

平成11年 3月 5日 情報処理室改装

平成12年 4月 1日 校長 前田勝 退職 日南農林高等学校教頭 小野順章を校長に任命

平成12年11月 8日 実習宿泊室を厩舎に改造

平成14年 3月20日 厩舎完成 馬場移転完成

平成14年 4月 1日 校長 小野順章 高鍋農業高等学校へ転出 高鍋農業高等学校教頭 橋口哲夫を校長に任命

平成14年 6月17日 運動場（部室含む）整備

平成14年10月 5日 創立50周年を迎える

平成15年 2月22日 普通教室棟（農場管理室含む）大規模改造完成

平成15年 4月 1日 福祉生活科を福祉科に改称

平成16年 4月 1日 校長 橋口哲夫 門川農業高等学校へ転出 日南農林高等学校教頭 成合新を校長に任命

平成18年 4月 1日 校長 成合新 退職 宮崎東高等学校校長 南崎貞克を校長に任命

平成20年 4月 1日 校長 南崎貞克 退職 高原高等学校教頭 阿久根治喜を校長に任命

平成23年 4月 1日 校長 阿久根治喜 退職 宮崎県教育庁産業教育担当主幹 矢田憲太郎を校長に任命

平成25年 3月 2日 閉校式举行



生徒歌

谷口 藤吉 作詩
作曲

Moderato



よ う あー い
こ む る たー か ち ほ に あー け ぼ の はー ゆ る
いー ら か こ そ さー め て も きー え ぬ わー か き こ
の うー ま し ゆ めー に も にー た る か な

- 一 杵 霽(しやうあじ)こむる高千穂に
あけぼの映(は)ゆるいらかこそ
覚めても消えぬ若き子の
美(うま)うまー夢にも似たるかな
- 二 松に千丈の響きあり
御池の里や王子原
もつれて解けぬ悩みをば
現世(うつし)うつしと遠く語れか
- 三 明日に文化を担(は)いたる
我等が行手(か)赫(あ)かよぬ
湧きたつ血潮胸にーぬ
究(きま)めよ真理一筋に
- 四 君つえひけよ丘の上
繚乱(りやうらん)とて花は咲く
おお青春は暮れやすー
多感の乙女いざ舞えよ
- 五 自治の金鼓(きんこ)を打て君よ
堅琴(かたきん)たてとてわれ和さん
うなき日よこの命
歌わさらぬや春愁(はるじゆう)を

校歌

作詞 吉藤 谷口
作曲 三敬 堀内

♩ = 100

あかねかがようたかちほをけだ
かくあおぐよきさとに
ひろびろと
つめくさのはたひらめきて
わかきちしおはおどるかenaあ
あたかはるさかえあれれ

一

あかねかがよふ高千穂を
けだかく仰ぐよき里に
つめ草の枝旗(はた)ひらめきて
若き血潮は躍るかな
ああ高原栄光(さかえ)あれ

二

雲に聳ゆる神杉(じんさん)に
大古(おおく)をしのぶ狭野(せいの)の里
濁世(にごよ)の塵(ちり)は遠くいて
清(きよ)し我(われ)らが和(わ)の誓(ちか)い
ああ高原栄光あれ

三

望(のぞ)む東(ひがし)の大淀(おほいづみ)の
沃野(わくや)広漠(ひろばく)につくるなく
遙(とほ)に思(おも)う洋々(やうやう)の
希望(きぼう)涯(ぎ)はななきこのあした
ああ高原栄光あれ

四

匂(にお)いかそけき百草(ひゃくそう)の
花(はな)咲(さ)き花(はな)は散(ち)るぬとも
交(かたみ)に友(とも)と手(て)をととりて
真(ま)理(り)究(きゆう)めんいごころに
ああ高原栄光あれ

五

王子(おうじ)が原(がはら)のますらをよ
御池(ごいけ)の里(の)の乙女子(おんな)よ
賛(さん)歌(か)(ほぎうた)共に歌(うた)いつつ
高(たか)き理(り)想(さう)へ進(すす)めか
ああ高原栄光あれ

卒業生一覽

年 度	卒業回	全 日 制											定 時 制			合 計	
		有畜農業科	農 業 科	畜 産 科	生産流通科	農産化学科	食品化学科	農村家庭科	生 活 科	生活科学科	福祉生活科	福 祉 科	小 計	農 業 科	農村家庭科		小 計
昭和27年	1			29								29				29	
28年	2			27								27	7		7	34	
29年	3			23				22				45	5		5	50	
30年	4			28				31				59				59	
31年	5			35				30				65	5		5	70	
32年	6			36				27				63	2		2	65	
33年	7			44				40				84	3		3	87	
34年	8	24		31				29				84	24	5	29	113	
35年	9	30		36				40				106	9		9	115	
36年	10	23		39				40				102	4		4	106	
37年	11	17		38				40				95	5	2	7	102	
38年	12	20		29				40				89	5	7	12	101	
39年	13	32		33				43				108				108	
40年	14	43		45					45			133				133	
41年	15	44		42					45			131	19		19	150	
42年	16	43		45					34			122	17		17	139	
43年	17	38		39					40			117	11		11	128	
44年	18	41		43					41			125	20		20	145	
45年	19		33	72		29			42			176	16		16	192	
46年	20		35	76		40			43			194				194	
47年	21		36	66		30			40			172				172	
48年	22		33	73		38			40			184				184	
49年	23		26	72		35			41			174				174	
50年	24		29	69			36		39			173				173	
51年	25		32	70			34		40			176				176	
52年	26		35	66			38		41			180				180	
53年	27		33	62			34		38			167				167	
54年	28		32	65			38		24			159				159	
55年	29		32	74			37		31			174				174	
56年	30		32	62			35		34			163				163	
57年	31		29	67			36		35			167				167	
58年	32		27	38			34		27			126				126	
59年	33		20	31			30		18			99				99	
60年	34		29	34			36		31			130				130	
61年	35		23	24			35		19			101				101	
62年	36		11	24			35		16			86				86	
63年	37		9	25			32		7			73				73	
平成元年	38		22	26			37		14			99				99	
2年	39		17	33			34		18			102				102	
3年	40		22	12			29		14			77				77	
4年	41		6	14			32			17		69				69	
5年	42				32		35			13		80				80	
6年	43				32		30			18		80				80	
7年	44				38		37			21		96				96	
8年	45				31		32				36	99				99	
9年	46				39		35				39	113				113	
10年	47				40		32				41	113				113	
11年	48				35		36				38	109				109	
12年	49				38		38				39	115				115	
13年	50				35		38				40	113				113	
14年	51				37		37				37	111				111	
15年	52				37		36				41	114				114	
16年	53				38		35				36	109				109	
17年	54				35		36					107	36			107	
18年	55				33		40					108	35			108	
19年	56				38		37					115	40			115	
20年	57				34		31					102	37			102	
21年	58				32		32					100	36			100	
22年	59				35		40					109	34			109	
23年	60				36		36					105	33			105	
24年	61				37		37					112	38			112	
合計		355	603	1797	712	172	1332	382	857	69	347	289	6915	152	14	166	7081



農村家庭科（1962年）



有畜農業科（1963年）



生活科（1970年）



農産化学科（1974年）



畜産科（1977年）



農業科（1979年）



生活科学科（1994年）



食品化学科（1994年）



福祉生活科（1997年）



生産流通科（2001年）



福祉科（2008年）



本誌の表題・スローガン・校訓の文字は、第26回卒業生 仮屋田浩氏によるものです。